林　周二著

流通革命新論

第二ラウンドの流通革命に，政策と経営は何を志向すべきか

流通革命新論　東京大学教授 林　周二著

中公新書 42　　¥380

中公新書

42

中公新書 42

林 周二著

流通革命新論

中央公論社刊

林　周二（はやし・しうじ）

1926年（大正15年）に生まる．1948年，東京大学経済学部卒業．現在，東京大学教養学部教授．統計学を担当．

著書『流通革命』
『システム時代の流通』
『数学再入門 I，II』（以上中公新書）
『統計学講義』
『流通経済の課題』
『マーケティングの計画』
『マーケティング・リサーチ』
その他多数．

流通革命新論
中公新書 42
© 1964年
検印廃止

昭和39年6月25日初版
昭和51年10月5日21版

著者　林　周二
発行者　高梨　茂

本文印刷　三陽社
表紙印刷　トーブロ
製　　本　小泉製本

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋2—1
振替東京2－34 電話（561）5921 代

装幀　白井晟一

執筆に際して

小著『流通革命』（以下、前著という）を中公新書で上梓してから一年半を閲する。

この間において流通問題に対する一般の関心は非常に高まり、また流通経済の諸局面は極めて大きな変貌を遂げた。流通革命という言葉も、前著の出る以前からマスコミュニケーションの世界では既に、かなり広く用いられていたが、今日では言葉そのものが――用語法は人によってまちまちであるけれども――普く大衆の常識になった。この一年半の間の顕著な変化を指摘してみると次のようである。

1　政府が流通経済の問題にはじめて高い関心を寄せるようになり、〝流通経済政策〟とでもいうべきものが動き始めてきた。従来、道路計画、都市計画、宅地造成、中小商業対策、農民対策、運輸行政というような形で個々別々に考えられてきた流通経済の諸問題について、一元的な視野に立つ政策をとることが必要だという認識が、ともかくも芽生えるようになったことは、大きな進歩だといってよい。その徴候を具体的な動きについて拾ってみると

a　倍増計画の再検討を通じて、流通対策が経済の長期ないし中期計画へ織り込まれるようになってきたこと。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

b　極めて不十分ではあるが、流通関係の政府予算が計上され始めたこと。とくに道路整備五ヵ年計画は、わが国として未曾有の四兆円余りを投入することを決定。そのほか流通団地の設置、自動車ターミナルの建設、生鮮食料品流通改善措置、中小商業の近代化・高度化策費など、それぞれ前年より大幅な増加をみせ、流通設備充実の方向が示唆されるようになった。

c　消費者行政が発足するに至ったこと。昭和三十九年度から経済企画庁に国民生活局ができ、通産省に消費経済課が新設されるなど、これまで主として生産面を向いていた行政が、消費者面へも若干向くようになったこと。

d　各省の流通関係統計調査が充実する傾向（例えば農林省の流通統計資料室）を示し、かつ統計基準局を中心に流通関係の統計体系整備が企画されるようになったこと。

などが指摘できる。

2　世論　ことに中小商業者たちなど流通担当者、取引担当者の考え方の上に大きな変化が見られるようになった。例えば昭和三十八年の前半までは、中小商業者たちは全国でスーパーマーケット反対大会を開くなど、その規制を主張してきたし、政治家、官庁、論壇のなかからもこれに和する声が聞かれた。しかし同年秋頃からは一部政治家の間から新しい形態の大型小売店を育成する必要が説かれ、また政府諮問機関もスーパーマーケット類の規制が不当であるという決定に傾き、小売団体内の世論も自分たちの運動が国民経済の支持を得ることのできないものである

ことを実感するようになった。「スーパー規制からむしろ育成へ」は、世の考え方の価値基準が大きく転換したことを意味する。中央卸売市場の改革に関しても、一昨年後半それが提唱された頃の市場側抵抗は甚だしく大きいものであったが、今日ではその大改造は既定のプログラムに従うものと見られるに至っている。

3　流通経済の担い手たちの上に各種の変化が現われるようになった。その最も著しいものを指摘するならば、戦後膨張の一途を続けてきた卸売業者、小売業者の事業所数が、昭和三十七年を境にして減少に転じたことである。同年の「商業統計調査」結果と、三十五年のそれとを比べると、その減少率は僅かに小売一・一%、卸一・九%に過ぎないが、いわゆる卸・小売業がここに一つの転換点を超えたことを示すものといってよい。またスーパーマーケットの名を冠する小資本的安売店に整理の風が吹くようになったことも――いずれは考えられることであったが――大方の予想以上に速かなものがあった。

4　流通革命論議が活潑化し、ブームの観を呈するようになった。数冊の編著的単行書が相継いで刊行されたし、雑誌上に現われた文章に至っては枚挙に暇がないほどである。これら文章には各業界の利害を背景にし、それぞれの立場を合理化したものが甚だ多いけれども、数あるうちには労作的な論究も少くない。例えば名東孝二教授の「生産財の流通革新」（中小企業診断協会編『今

日の流通革新』所収）や、日本通運総合研究所の手になる『日本の輸送革新』などは、労作の一例である。

本書は、前著上梓以後における上述のような諸局面の変化を考慮し、今後の流通問題ないし流通革命論それ自体に対する世の一層の理解を冀って執筆するものである。前著に対し数々の批判を頂戴したことも、私が本書を執筆する大きな動機となったことを言い添えたい。本書の内容は私への各種批判に対する私なりの考え方、見方を含んでいる。とまれ極めて数多くの諸氏が私の著作や所説に対し論及されたことは、私にとっては光栄であり、ここに謝意を表したい。

なお前著の成立に関しこの際一言しておきたい。「中公新書」の一冊として企画された前著は、もともと実務家読者を対象とした実務指針書ではなく、また白書的記録でも、将来計画書でも、さらに純粋な学術論文として書かれたものでもなかった点に関してである。

言うまでもなく、同「新書」は一連の教養読物シリーズであり、主たる読者層を、いわゆる読書階級の人びとに置いている。そういう知識層読者に対し、流通や商事のような極めて形而下の問題の動向へ関心を注いで貰うこと、そこに前著企画の趣旨があった。しかし思想解説や歴史叙述と違い、「新書」読者層にとっては最も馴染少いだろうこの種のテーマについて、どのような記述の仕方、材料の取扱い方をすることが最も理解に資するかには、思案を重ねざるをえなかっ

た。実務書や白書でない以上、思い切った類型的表現で事物の本質描写を企てたのもそのためであり、学術書や計画書でない以上、奔想（それは虚構と同義語ではない）を旋らせて未知未見の空間を埋める手法を縦横に試みたのも、同じ理由によるものであった。このことを喩えていえば、前著『流通革命』は流通革命の〝絵画〟を意図したものであって〝設計図〟を志したものではない。絵画には絵画の意義がある。

だが前著は世上、流通革命に関する一幅の絵画としてよりも同じく一枚の設計図として受け取られたようである。なぜならそれは「新書」が意図する教養目的の読書人たちよりも、むしろ現に流通に関与している実務家、実際人たちによってヨリ多く読まれたからである。彼らの多くは前著を実務の直接指針書、ないし青写真的設計図として受け取ったらしい。

このことは前著に思いがけぬ幸運と同時に不幸な運命を与えた。幸運の点に関していえば、予期以上多数の読者を得たことである。不幸の点では、本来心豊かな眼の観賞をまつべき絵画が、設計図と看做され、理解されたことである。そういう観点から論評する〝生真面目〟で〝真摯〟で〝真正直〟な観賞者――いな非観賞者というべきであろう――や批評家が、余りにも数多く現われたのには、閉口せざるをえなかった。ただ、そういう非観賞者層が押しかけて来そうな時期に、来そうな場所へ、絵画作品を不用意に出陳した迂闊さは著者の責任である。比喩を用いるならば、写楽やピカソの描いた肖像画の線が、自動車免許証用や手配人物用の写真の線と混同を受

けたのに似て、前著は「現実ばなれした作品」とか「世をまどわす描写」とかいう批評をうけた。もっとも、著者の絵筆の力が、浮世絵やシュールリアリズムの巨匠になぞらえるべく余りに貧弱だという意味での批判ならば、それはむろん甘受しなければならぬ。

前著を継ぐ本書もまた同一の叢書に属し、意図は前著を襲う。ただ前著の読者層の生真面目さに応える義務を感じたので、今回は筆勢をやや変えて、絵画の絵筆をやや写実に近づける。前著に比べ、本書は絵画作品としての面白みを甚だ減殺したものとして成立するだろうが、ある程度は止むをえない。筆者の意図する本来の読者へは、ひたすら寛恕を願うほかない。

作者の意図は、飽くまで、作品自身をして語らしめることを本旨とすべきであるが、このさい敢えて蕪言を添えるのは、本書をして、再び前著の轍を踏ませるに忍びない著者の気持からである。

執筆を了えて。

紙数を制約された小冊子のなかで、流通経済の当面する緊急な諸問題と、それらの間の有機的な関連とを論じ尽すことは、私にとってすこぶる難事であったが、ともかく一応の形を纏めえた。紙幅の関係上、割愛した問題も少くないが、この点については他日を期したい。

なお筆を擱くに当って著者の希望を一つ。それは読者が流通問題を考察する場合には、常に次

の点に予め特に注意をして戴きたいということである。

第一は、とくに実務家の読者にお願いしたいことであるが、あらゆる問題を考察するに当り、「部分的な真理」をもって「全体的な真理」と置き換えることのないよう常に留意して欲しい。例えば、業界の利益である価格協定が、往々にして経済全体の利益と背馳するなどは誤りの一例である。

第二に、私たちは「中小商業問題」を考察しているのではなく、「流通経済問題」を考察しているのだということである。後者のためには、前者を考えることが不可避であるにしても、主眼は飽くまでも後者にある。…しかも私たちは〝流通を考えてゆく〟というだけでなく、〝流通で考えてゆく〟姿勢をもつべきである。随って流通政策ということも、単に〝流通をどうすべきか〟の政策としてではなく、〝流通という「国民経済の重要な支点」を、一般経済政策のために、どう有効に活かすべきか〟という立場から見直されなければならない。換言すれば、流通政策を欠いた経済政策は有りえない、ということである。

一九六四年六月

林　周二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〔**左の写真**〕戦後のイギリスは，田園の真中に理想の新都市づくりを試み，大都市人口の分散を図った。そこにはいずれも理想に近いショッピング・センターが設けられ，消費生活が市民の文化生活とも融けあっている。写真はニュータウン“スティヴニジ”のシティ・センター。正面は大型店チェーンの“ウールワース”。時計塔はエリザベス女王の臨御記念に建てられたもの。

目次

執筆に際して

序論　システム変革の論理

A　基本的な考え方（1）　4
B　基本的な考え方（2）　12

I　流通経済政策の急務

第1章　これまで流通問題はどう扱われてきたか……24
A　いわゆる「流通革命」論議　24
B　商業・販売および流通　33
C　流通設備が意味するもの　42

第2章　わが国で「流通革命」はなぜ必要であるか……53
A　物価問題と流通問題　53
B　流通面における労働力　68

第3章　これに対する「政策」は十分といえるか……79
A　企業努力の限界点　79
B　ファルクラムとしての流通　88

C ばらばらな政策主体（1） 98
D ばらばらな政策主体（2） 107

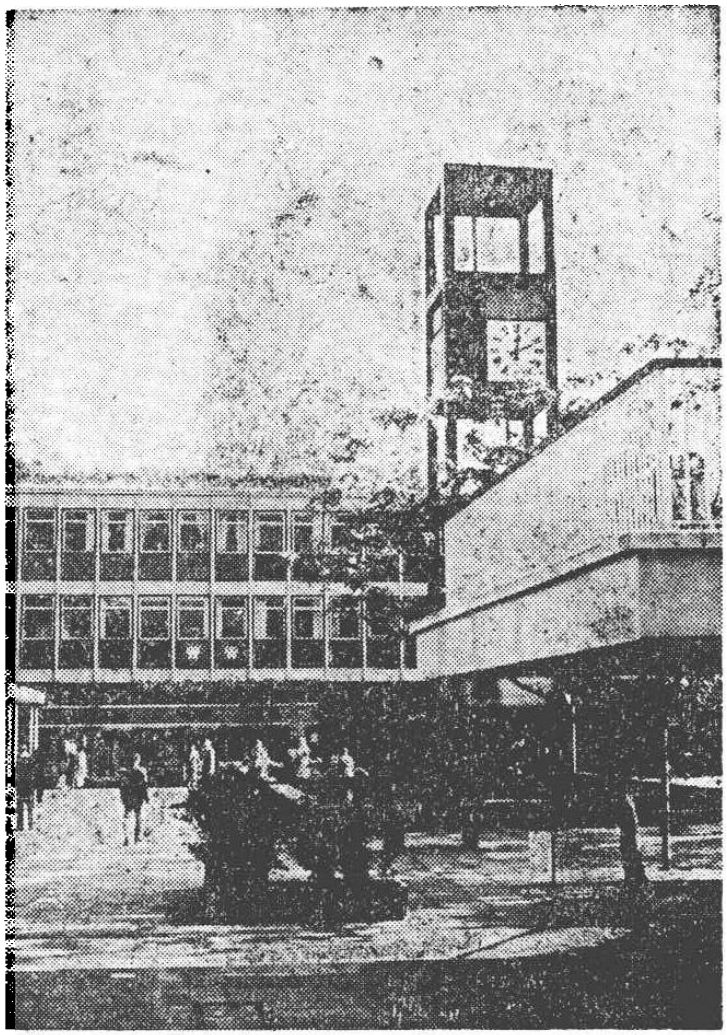
Ⅱ 流通機構の現状と問題点

第4章 各種流通機構の現状はどうなっているか……114
A 商品流通機構の現状 114
B フィジカル・チャネルの現状 126

第5章 きたるべき流通秩序をどう見たらよいか……140
A 大量流通の意味するもの 140
B 大売店と専門店 152
C フィジカルな流通の展望 164
D 国民生活への影響 172

第6章 流通経済をどんな「理論」で考えるべきか……179
A 規模の経済の原則 179
B 流通機能の自立の原則 186
C 流通分業の原則 192
D 鍵になる価格競争 197

流通革命新論



序論　システム変革の論理

ひとつの音楽には題目（タイトル）とともに、全曲を貫くそれの主題（テーマ）があるように、ひとつの論述にもまた、それの表題とともに全文を流れる主題がなければならない。本章では本書の主題ともいうべきものを、誰にも判りやすい形で提示することから筆を起そう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com